

研究 主題	どの児童も満足感を味わうことができる授業を目指して ー器械運動領域において課題を共有し、課題解決を図る学び合いを通してー
----------	---

第5学年体育科学習指導案

指導月日 令和4年10月28日

所属校名 南三陸町立入谷小学校

氏名 佐々木 大堯

1 単元名 器械運動「跳び箱運動」

2 単元の目標

- (1) 跳び箱運動の楽しさや喜びを味わい、その行い方を理解するとともに、切り返し系や回転系の基本的な技を安定して行ったり、発展技を行ったりすることができる。〔知識及び技能〕B(1)ウ
- (2) 自己の能力に適した課題の解決の仕方や技の組み合わせ方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができる。〔思考力、判断力、表現力等〕B(2)
- (3) 運動に積極的に取り組み、約束を守り助け合って運動をしたり、仲間の考えや取組を認めたり、場や器械・器具の安全に気を配ったりしようとする。〔学びに向かう力、人間性等〕B(3)

3 単元観

本単元は、小学校学習指導要領（平成29年告示）体育〔第5学年及び第6学年〕内容の「B 器械運動」「ウ 跳び箱運動」を受けて設定した。

跳び箱運動は、技を身に付けたり、新しい技に挑戦したりするときに楽しさや喜びを味わうことができる。得意な児童は、技のできばえをより良くするために意欲的に取り組むことができるが、苦手な児童にとっては、不安感から、消極的になる運動でもある。

自己の能力に適した課題に挑み、課題を達成することで、「できそうだ」「できた」という技能面の実感を持つことができる。また、ペアやグループで課題解決する過程の中で、「仲間のアドバイスで技のこつをつかんだ」「練習方法を工夫した」という思考面の実感を持つことができる運動でもある。

なお、高学年では、中学年までに学習してきた切り返し系（開脚跳び）や回転系（台上前転）などの基本的な技を安定して行ったり、その発展技に取り組んだりすることをねらいとしている。

4 児童の実態〔第5学年1組9名〕

本学級には、男子7名、女子2名が在籍している。7月の意識調査では、「跳び箱運動の学習が好きですか」という質問に対して、「結果が出るとうれしい」などの理由から、5名が「好き」、1名が「どちらかというと好き」と答えている。一方で「得意ではない」などの理由から、2名が「どちらかというと好きではない」、1名が「好きではない」と答えている。

実態調査では、「開脚跳び」を8名、「台上前転」を6名が跳ぶことができている。跳ぶことができない児童は、踏み切りが弱いことや順次接触ができていないことがつまずきの理由として挙げられる。

授業実践Ⅰ（「マット運動」）では、導入時に示範と自己の技を比較し、技の課題を明確にする姿が見られた。また、展開後段で撮影した技と前時までの自己の技を比較し、自己の課題に沿って技の達成度や互いのアドバイスの良さについて振り返る姿も見られた。

また、「用具（踏み切り板や跳び箱台等）を工夫して使う」と8名の児童が答えており、互いの課題を意識しながら場の設定を工夫していた。一方で、自己の課題を意識しても技のできばえが上達しなかったり、「開脚跳び」と「台上前転」の双方を跳ぶことができなかったりする児童も見られる。「できる」「できない」の個人差があるという児童の実態から、段階的に技を身に付けさせるための指導過程の構成や教師の直接的な支援を工夫していくことが重要である。

意識調査及び実態調査（7月20日）		実施人数9名
1 跳び箱運動の学習は好きですか。		
①好き		5名
②どちらかというと好き		1名
③どちらかというと好きではない		2名
④好きではない		1名
2 1で答えた理由を教えてください（自由記述）。		
・結果が出るとうれしい（3名） ・様々な高さに挑戦できる（2名） ・高く跳べる（1名） ・得意ではない（2名） ・思うどおりに跳ぶことができない（1名）		
3 跳び箱運動の学習では、目標としている技が「できそうだ」「こつをつかんだ」と感じたことがありますか。		
①感じたことがある		5名
②どちらかというと感じたことがある		3名
③どちらかというと感じたことがない		1名
④感じたことがない		0名
4 跳び箱運動の学習では、「課題に合った練習方法が分かった」「友達のアドバイスを参考にすることができた」と感じたことがありますか。		
①感じたことがある		5名
②どちらかというと感じたことがある		3名
③どちらかというと感じたことがない		1名
④感じたことがない		0名
5 マット運動の学習では、どのような練習方法で解決しようとしてきましたか（複数回答可）。		
①友達同士でアドバイスをする		6名
②用具（踏み切り板や跳び箱等）を工夫して使う		8名
③学習カードを使う		5名
④タブレット端末で互いの技を見合う		4名
⑤技の動画を見る		6名
6 開脚跳び	跳ぶことができる	8名
	跳ぶことができない	1名
7 つまずきの原因	・踏み切りが弱い（踏み切りの力を生かすことができていない） ・着手の位置が手前過ぎる	
8 台上前転	跳ぶことができる	6名
	跳ぶことができない	3名 跳び箱台の上にマットを置くと、2名が跳ぶことができる
9 つまずきの原因	・跳び箱台の上で回ることが怖い ・順次接触ができていない（頭頂部から跳び箱台に着いている）	

5 指導観

本単元では、基本的な繰り返し系（開脚跳び）や回転系（台上前転）の技に安定して取り組むことができるようにしていく。基本的な技に十分に取り組んだ上で、発展技にも取り組んでいく。

指導に当たっては、意識調査及び実態調査から苦手意識のある児童がいることを踏まえ、単元全体を通して、基本的な技や発展技の基礎となる感覚づくりを補助運動の中に取り入れていく。自己の課題に合わせて練習方法や場所を選択しながら課題解決したり、教師が直接的な補助や声掛けをしたりすることで、どの児童にも「できそうだ」「できた」という実感を味わわせていく。

授業実践Ⅰ（「マット運動」）では、タブレット端末の2画面機能を活用しながら示範動画と事前に撮影した自己の技を比較させたことで、技の課題を明確にすることができた。しかし、取り上げた技の課題を十分に意識することができない児童が見られた。課題をより意識付けさせるために、「強く踏み切るために、『バン』と強く踏み切る」など、技のこつを言語化させる。また、自己の課題を意識し

ながら練習に取り組んでも、技のできばえが上達しない児童も見られた。課題解決することができた児童を教師が見取り、モデルとなる児童の動きや技のこつについて話し合わせたり、自身の練習方法に活用させたりすることで、学び合いを深めさせていく。さらに、児童の実態に応じて、教師が直接、補助や声掛けをしたり、動きを示範したりすることで、自己の課題に合わせた体の動かし方を段階的に身に付けることができるようにしていく。

6 研究主題との関連

本主題の「満足感」とは、「児童が運動に取り組む中で、『技ができそう』『できるようになった』という技能面や、『練習方法を工夫した』『互いのアドバイスが良かった』という思考面における実感」と捉える。また、副題の「学び合い」とは、「課題を共有したり、課題解決を図ったりするために、全体やグループで話し合ったり、アドバイスや場の設定の仕方を工夫したりすることで、互いの課題をより良く解決する活動」と捉える。

本主題に迫るために、以下のような手立てを講じていく。

(1) 手立て1 自己の技の課題を明確にし、全員の課題を共有させるための学び合い【課題の共有】

自己の技の課題を明確にさせるために、タブレット端末の2画面機能を活用しながら示範動画と事前に撮影した自己の技を比較させる。また、児童から技の課題を取り上げながらホワイトボードに示し、意識したい課題に名前磁石を貼らせることで、全員の課題を共有させる。さらに、技の課題を取り上げる際には、課題をより意識付けさせるために、「跳び箱を強く押すために、『ドン』と強く押す」「美しく着地するために、両足をそろえて『パン』と着地する」など、技のこつを言語化させる。

(2) 手立て2 課題に合った練習方法を明確にし、アドバイスや場の設定を工夫させるための学び合い【練習方法の明確化】

課題に合った練習方法を明確にし、アドバイスや場の設定を工夫させるために、個人やグループで学習カード（技のポイントや課題に応じた練習方法等の記載）を活用しながら課題解決に取り組ませる。課題解決の際には、同様の練習方法や場所を選んだ児童同士がペアやグループを組み、導入時に全員の課題を示したホワイトボードで互いの課題を確認しながら、練習に取り組ませる。また、課題解決することができた児童を教師が見取り、モデルとなる児童の動きや技のこつについて話し合わせたり、自身の練習方法に活用させたりすることで、学び合いを深めさせていく。さらに、児童の実態に応じて、教師が直接、補助や声掛けをしたり、動きを示範したりすることで、課題に合わせた体の動かし方を段階的に身に付けることができるようにしていく。

7 単元の指導と評価の計画

(1) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①跳び箱運動の行い方を理解することができる。 (B(1)ウ)	①タブレット端末を活用しながら自己の能力に適した課題を見付け、課題解決の仕方を考えたり、練習方法を選ぼうとしたりしている。 (B(2)ア)	①跳び箱運動に積極的に取り組み、約束を守り助け合って運動をしたり、仲間の考えや取組を認めたり、場や器械・器具の安全に気を配ったりしようとしている。 (B(3))
②自己の能力に適した切り返し系や回転系の基本的な技を安定して行うことができる。 (B(1)ウ)	②課題解決のための技のこつについて、自分や仲間が考えたことを他者に伝えようとしている。 (B(2)イ)	
③基本的な技の発展技を行うことができる。(B(1)ウ)		

(2) 単元の全体計画（7時間扱い 本時6／7時間目）

時数	1	2	3	4	5	6（本時）	7
導 入	・ 集 合 ， 整 列 ， 挨拶 ・ めあての 確 認	①集合，整列，挨拶 ②場の準備 ③準備運動 ④補助運動(馬跳び，うさぎ跳び，大きな前転，跳び上がり下り，またぎ乗り下り，踏み切り練習，既習の技（開脚跳び，台上前転等）					
	・めあての確認 【開脚跳び】	・めあての確認 【かかえ込み跳び】	・めあての確認 【台上前転】	・めあての確認 【伸膝台上前転】	・めあての確認 【伸膝台上前転】	・めあての確認 【伸膝台上前転】	・めあての確認 ・発表会に向けた練習をする。
	【オリエンテーション】 ・安全な学習の進め方や場の準備の仕方を確認する。	手立て1 自己の技の課題を明確にし，全員の課題を共有させるための学び合い【課題の共有】					
展 開	・補助運動(馬跳び，うさぎ跳び，大きな前転，跳び上がり下り，またぎ乗り下り，既習の技（開脚跳び，台上前転）に取り組む。	手立て2 課題に合った練習方法を明確にし，アドバイスや場の設定の仕方を工夫させるための学び合い【練習方法の明確化】					・学習した技を組み合わせながら発表会をする。 ・単元全体における練習方法の良さについて，教師から話を聞く。
		・開脚跳びの示範と自己の開脚跳びを比較させる。 ・意識したい課題に名前磁石を貼らせる。	・かかえ込み跳びの示範と自己のかかえ込み跳びを比較させる。 ・意識したい課題に名前磁石を貼らせる。	・台上前転の示範と自己の台上前転を比較させる。 ・意識したい課題に名前磁石を貼らせる。	・伸膝台上前転の示範と自己の伸膝台上前転を比較させる。 ・意識したい課題に名前磁石を貼らせる。	・伸膝台上前転の示範と自己の伸膝台上前転を比較させる。 ・意識したい課題に名前磁石を貼らせる。	
		・開脚跳びについて，課題に合った練習方法や場所を選び，課題解決に取り組む。	・かかえ込み跳びについて，課題に合った練習方法や場所を選び，課題解決に取り組む。	・台上前転について，課題に合った練習方法や場所を選び，課題解決に取り組む。	・伸膝台上前転について，課題に合った練習方法や場所を選び，課題解決に取り組む。	・伸膝台上前転について，課題に合った練習方法や場所を選び，課題解決に取り組む。	
終末	めあての技（発表会での技）を再度，撮影する。						
終末	①学習内容の振り返り（自己の課題に沿った振り返りをワークシートに記入，意図的指名による発表） ②片付け ③集合，整列，挨拶						
評価の重点	知	①（観察）	②（観察）	②（観察）	③（観察）	③（観察）	②，③（観察）
	思		①（観察，カード）	②（観察，カード）	②（観察，カード）	②（観察，カード）	
	態	①（観察，カード）					①（観察，カード）

8 本時の計画

(1) 目標

伸膝台上前転について，課題を共有し，アドバイスや場の設定を工夫しながら課題解決に取り組むことで，どの児童も満足感を味わうことができる。

(2) 本時の指導に当たって

どの児童も満足感を味わうことができる授業を目指すために，以下の手立てを講じていく。

① 手立て1 自己の技の課題を明確にし，全員の課題を共有させるための学び合い【課題の共有】

自己の技の課題を明確にさせるために，タブレット端末の2画面機能を活用しながら示範動画の伸膝台上前転と前時に撮影した自己の伸膝台上前転を比較させる。また，児童から技の課題を取り上げながらホワイトボードに示し，意識したい課題に名前磁石を貼らせることで，全員の課題を共有させる。さらに，技の課題を取り上げる際には，課題をより意識付けさせるために，「腰を高く上げるために，『バン』と強く踏み切る」ことや「膝を伸ばすために，つま先まで『ピン』と伸ばす」など，技のこつを言語化させる。

② 手立て2 課題に合った練習方法を明確にし，アドバイスや場の設定を工夫させるための学び合い【練習方法の明確化】

課題に合った練習方法を明確にし，アドバイスや場の設定を工夫させるために，学習カード（腰を高く上げるという課題と膝を伸ばすという課題を解決するための練習方法を記載）を活用しながら自己の課題に合った練習方法や場所を選び，課題解決に取り組ませる。また，課題解決することができた児童を教師が見取り，モデルとなる児童の動きや技のこつについて話し合わせたり，自身の練習方法に活用させたりすることで，学び合いを深めさせていく。さらに，児童の実態に応じ，腰の位置や膝の動きについて，教師が直接，補助や声掛けをしたり，動きを示範したりすることで，課題に合わせた体の動かし方を段階的に身に付けさせていく。

(3) 指導過程

段階	学習活動 ○主な発問・指示 ◆予想される児童の反応	形態	指導上の留意点	評価
導入 12分	1 集合、整列、挨拶をする。	一斉	◎安全面に気を付けさせながら素早く準備をさせる。	
	2 場の準備をする。 ・場の設定の様子をモニターに映す。	個人	◎伸ばす部位を意識させる。	
	3 準備運動をする。		◎技の基礎となる感覚づくりに取り組ませる。	
12分	4 補助運動（基礎感覚づくり運動）をする。 ・馬跳び ・うさぎ跳び ・大きな前転 ・跳び上がり下り ・またぎ乗り下り ・踏み切り練習 ・台上前転			
	5 本時のめあてを確認し、自己の技の課題を明確にし、全体で課題を共有する。	一斉	◎自己の技の課題を明確にさせるために、示範動画と前時に撮影した自己の技を比較させる。	
	○今日も伸膝台上前転に挑戦します。よりダイナミックに跳ぶための課題を意識して取り組みましょう。 ○腰を高く上げるためには、どのようなことに気を付ければ良いですか。 ◆「バン」と強く踏み切ります。 ○膝を伸ばすためには、どのようなことに気を付ければ良いですか。 ◆膝を（つま先まで）「ピン」と伸ばす。 ◆足を天井の方に高く上げる。		◎全員の課題を共有させるために、技の課題に名前磁石を貼らせる。 ◎課題をより意識付けさせるために、「腰を高く上げるために、『バン』と強く踏み切る」ことや「膝を伸ばすために、『ピン』と伸ばす」など、技のこつを言語化させる。 【手立て1：課題の共有】	
展開 26分	6 課題に合った練習を行い、課題解決をする。 ◆腰を高く上げるという課題を解決するために、練習方法や場所を選びながら取り組む。 ・ロイター板を強く踏み切り、腰の位置を跳び箱台よりも高く上げる練習をする。 ・腰の位置が高い状態から回る練習をする（ポートボール台を置いたり、ゴムひもを使ったりした練習をする）。 ◆膝（つま先まで）を「ピン」と伸ばすという課題を解決するために、練習方法や場所を選びながら取り組む。 ・床を蹴り、重ねたマットの上で、膝を伸ばす練習をする。 ・跳び箱の上にマットを置き、練習をする。 ◆実際の伸膝台上前転に挑戦する練習に取り組む。	グループ	◎課題に合った練習方法を明確にし、アドバイスや場の設定の仕方を工夫させるために、学習カード（腰を高く上げる課題と膝を伸ばす課題を解決するための練習方法等の記載）を活用しながら課題解決に取り組ませる。 ◎腰を高く上げる課題と膝を伸ばす課題について、課題解決した児童を教師が見取り、モデルとなる児童の動きや技のこつについて話し合わせたり、自身の練習方法に活用させたりすることで、学び合いを深めさせていく。 【手立て2：練習方法の明確化】	
			◎苦手意識のある児童には、教師が直接補助を行い、段階的に動きを身に付けさせる。	
	7 技を撮影する。 ○ホワイトボードに貼った自分の課題を、撮影する友達に伝えてから撮りましょう。	ペア	◎導入時に共有した自己の課題を意識しながら技を再度、撮影させる。	

終末 7分	8 自己の課題に沿って学習内容を振り返る。 ○伸膝台上前転の自分の課題を解決するために、練習方法で良かったことや互いのアドバイスについて振り返りを記入しましょう。 ◆前の時間よりも膝が伸びるようになりました。膝を「ピン」と伸ばすというアドバイスを参考にしたらできるようになりました。 ◆「バン」と強く踏み切ることを意識したら、前よりも腰が高く上がり、よりダイナミックな技になりました。 ◆腰を高く上げるために、ゴムひもを使った練習方法が自分の課題に合っていたので、良かったと思いました。 9 片付けをする。 10 集合、整列、挨拶をする。	一 斉 ◎どの児童にも満足感を味わわせるために、撮影した自己の技を確認しながら、自己の課題に沿って技の達成度や練習方法の良さについて振り返らせる。 ◎次時への課題設定や学習意欲に結び付けさせるために、児童の変容を見取りながら振り返りの記述や伸膝台上前転を発表させる。 ◎安全面に気を付けながら協力して片付けをさせる。	【知識・技能】③ (観察) 【思考・判断・表現】② (観察、カード)
------------------	--	--	--

(4) 本時の評価

評価規準【観点】 (おおむね満足できる状況(B))	十分満足できる状況 (A)	努力を要する児童への手立て (C)
・腰を高く上げたり、膝を伸ばしたりすることを意識しながら、伸膝台上前転をすることができる。 【知識・技能】	・腰を高く上げたり、膝を伸ばしたりしながら、できればの良い伸膝台上前転をすることができる。	・教師が直接補助をしたり、踏み切り板やマットの設置等を工夫したりしながら伸膝台上前転のこつを段階的に身に付けさせる。
・伸膝台上前転の技のこつについて、友達と伝えたり、聞いたりしながら課題解決に取り組んでいる。 【思考・判断・表現】	・伸膝台上前転のできればを良くするために、技の具体的なこつを伝えたり、受け入れたりしながら、課題解決に取り組んでいる。	・学習カードや示範動画を活用させ、伸膝台上前転の技のこつを理解させながら課題解決に取り組ませる。

(5) 準備物

①教師：タブレット端末、モニター、ホワイトボード、技の連続的な動きの掲示物、名前磁石

②児童：タブレット端末、学習カード、筆記用具

(6) 場の設定（体育館）

